

## H・W・ヘンツェにおける「芸術と生の同一性」

—— シュルレアリスム受容に注目して

曹 有敬 (東京藝術大学)

---

本発表は、戦後第一世代(1920年前後に生まれた世代の総称)の作曲家であるハンス・ヴェルナー・ヘンツェ(一九二六—二〇一三)のシュルレアリスム受容という観点から、「芸術と生の同一性(Identität von Kunst und Leben)」に基づいたヘンツェの芸術観及び世界観の実質を明らかにするものである。

冷戦期の西ドイツにおいて、音楽は社会の問題と別個であるべきという理論的潮流に対して一連の左翼作曲家たちは音楽と社会の諸問題を結び付けようとした。ヘンツェは当時の社会的、政治的問題に積極的に取り組んだ左翼作曲家の一人と知られている。しかしながら、彼は左翼理論に完全に縛られていない、特定のイデオロギーを音楽の中に具体的に再現していない点において、同時代の他の左翼作曲家たちと大きく区別される。同時代の批評はヘンツェにおける伝統的なものへの転向を否定的に捉え、(マルクス主義的な)革命運動に十分に貢献していないという点で彼の音楽創作理念を批判していた。本発表ではその批判に対するヘンツェの反論を主に彼の言葉に即して検討し、同時代の左翼作曲家たちが志向していた「人間の想像力」を刺激することを、ヘンツェはどのように行っていたのかを論じる。

まず、ヘンツェの音楽スタイルに対する同時代の批判内容を概観した上で、その批判への反論としてヘンツェのシュルレアリスム受容を検討する。言語または具体的なイメージによって解釈される文学や美術といった芸術分野と異なって音楽は抽象性の高い芸術であるため、これまでのシュルレアリスム音楽に関する解釈が短絡的であったことを指摘し、ヘンツェのシュルレアリスム受容への考察の必要性を示す。次に、ヘンツェの「汚れた音楽」概念を取り上げ、音楽におけるシュルレアリスム的なコラージュの形式と内容を明らかにすることで、シュルレアリスム的なコラージュには「抵抗」概念が潜んでいることを主張する。そして、ヘンツェにおける「抵抗」の意味をより明確にするために、マルクス主義哲学者エルンスト・ブロッホ(一八八五—一九七七)との関係に着目し、ヘンツェにおけるシュルレアリスムがブロッホの「希望=抵抗」概念に基づいて発展したことを検証する。以上の考察を通じて、ヘンツェにおけるシュルレアリスムの政治性(革命を導く潜在力)の実態がより明確に解明される。

本発表の見通しは、冷戦期におけるシュルレアリスム音楽のあり方を、その思想的基盤や時代的文脈において問い直すことで、これまでのシュルレアリスム音楽への理解に新たな側面を提供することである。そこからまたヘンツェにおける「芸術と生の同一性」の意味を解き明かし、音楽と社会の関係に対する思考が音楽と社会を分離するかまたは統合するかという二元論ではなく多様なあり方を含んでいることを示す点にある。